

講演 3 更年期障害に対する漢

第 10 回 東 洋 医 学

町立大和総合病院 産婦人科
現 ハートライフ病院 産婦人科

多久島 康司 先生



はじめに

更年期障害治療の第一選択とされていたホルモン補充療法(HRT)は、NIH (National Institute of Health)が実施した無作為大規模臨床試験で、乳癌、心・血管系イベント、脳血管障害の発症率が当初の予測値よりも高率となったことが報告され、昨年、試験が中止された。このような状況下、更年期障害に対する漢方療法は今後益々重要性が高くなる可能性がある。

更年期障害の治療に用いる漢方薬としては、桂枝

茯苓丸、加味逍遙散、当帰芍藥散などの駆瘀血作用を有する方剤が一般的であるが、実際にはそれ以外にも有用な処方は多い。今回、駆瘀血剤以外で更年期障害に漢方治療が有用であった症例を報告する。

症例 1 53歳 女性

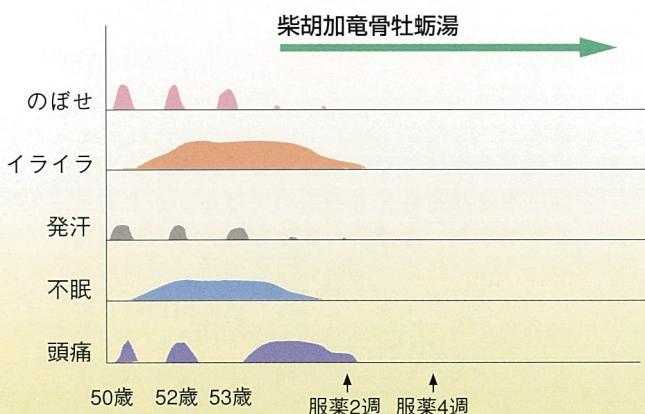
主訴はのぼせ、イライラ。既往歴として高血圧が指摘されているが、そのまま放置していた。

50歳頃より生理不順、のぼせ、イライラの自覚があったが放置していた。1年前に閉経した頃より症状が強くなり、生活に支障をきたすようになっていた。また、手足の冷え、動悸、頭痛もひどくなつたために当院受診となった。身長155cm、体重65kg、小太りで、やや実証。血液検査では閉経を示すホルモン検査値以外に異常を認めなかった。

腹診にて胸脇苦満、臍上悸を認め、腹力は充実。瘀血の徴候は認めなかった。また、比較的体力があり、精神神経症状が強いことから、柴胡加竜骨牡蠣湯を処方した。

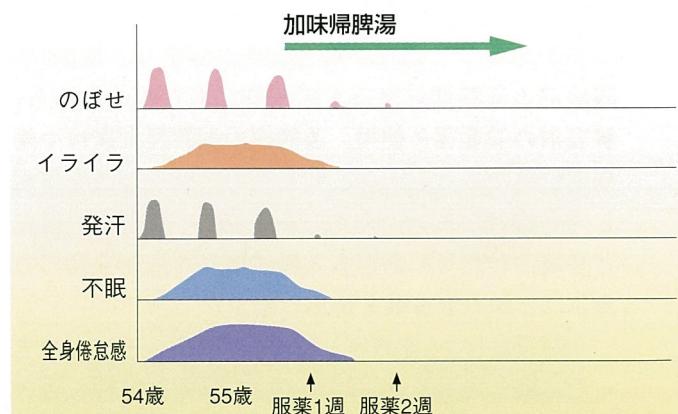
服薬2週後から精神神経症状はみるみる改善し、のぼせの自覚もほとんどなくなり、劇的に改善した(図1)。

通常、更年期障害で精神神経症状の強い場合には加味逍遙散を処方されることが多いが、本症例のように体力があり、イライラ、のぼせ、心悸亢進、抑うつ傾向など、肝と心の陽気の病的過剰状態、気鬱、



比較的体力があり胸脇苦満があり気鬱を伴っているため柴胡加竜骨牡蠣湯を処方した。2週後より症状の緩和が著明にみられて、以後処方を継続中。

図1 症例1 臨床経過



脾の機能の衰えによる気虚、血虚と精神不安と考えて加味帰脾湯を処方した。数日後よりよく眠れるようになり、元気になった。徐々に諸症状も改善した。

図2 症例2 臨床経過

方治療(駆瘀血剤以外に)

シンポジウム

胸脇苦満、臍上悸が見られるケースには、柴胡加竜骨牡蠣湯は有用と思われる。

症例2 55歳 女性

主訴は不眠、全身倦怠感、イライラ。特記すべき既往歴なし。

54歳で閉経し、その頃から全身倦怠感、不眠がひどくなった。また、疲れているのに細かいことが気になり、イライラし、食欲もない。すぐにのぼせや発汗するということで当科を受診した。身長153cm、体重40kg、痩せ型で見るからに虚証。血液検査にて軽度の貧血を認めた。

腹診にて軽度の胸脇苦満、心下痞鞭を認めたが、下腹部は軟弱で瘀血の徵候は認めなかった。脾の衰えによる気虚、血虛および肝・心の陽氣の病的亢進による精神不安と考え、加味帰脾湯を処方した。服薬開始数日後よりよく眠れるようになり、元気にな

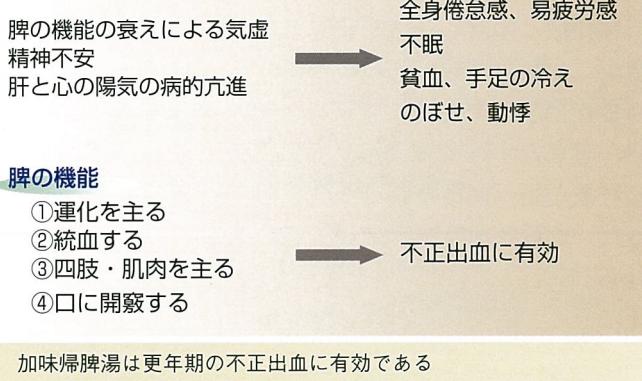


図3 加味帰脾湯(清世全書)

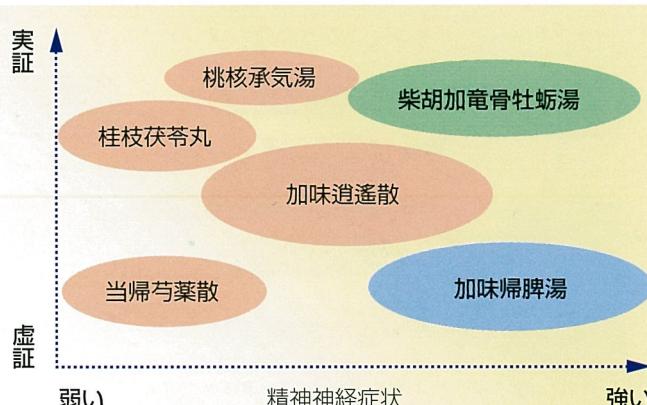


図4 更年期障害に対する漢方治療

ってきた。服薬2週後には顔つきが別人のようにしっかりし、そのほかの症状も徐々に改善した(図2)。

更年期障害に対する補剤の有用性についての報告は多いが、補剤の中でも脾の機能の衰えによる気虚、精神不安など精神神経症状の強い虚証には加味帰脾湯が有用であると思われる。また、脾には図3に示すように、統血の機能もあり、不正出血などを伴う更年期障害患者には非常に有用な方剤であると思われる。

まとめ

更年期障害に対する漢方治療としては、駆瘀血を中心とする桃核承氣湯、桂枝茯苓丸、加味逍遙散、当帰芍薬散などが一般によく処方される。瘀血の徵候があればこれら駆瘀血剤の中から虚・実を判断して選択すればよい。しかし、精神神経症状が強い場合は柴胡加竜骨牡蠣湯や加味帰脾湯も有用な場合がある(図4)。

ディスカッション Discussion

寺澤 漢方医学的な腹候あるいは瘀血をキーワードにして、更年期障害に対するアプローチの仕方を明確に述べていただきました。とくに加味帰脾湯が虚証の患者さんに極めて有効だという点は、臨床的にも大変有用なことだと思います。

篠崎 抑うつよりもイライラが強いケースでは虚証でも、私の経験では、加味帰脾湯よりも抑肝散や抑肝散加陳皮半夏が有効ではないかと思います。

三谷 婦人科領域では、桂枝茯苓丸、当帰芍薬散、加味逍遙散の3処方が繁用されますが、脾の機能の衰え(脾虚)に注目され、処方を考えられた症例2は示唆に富む症例です。

寺澤 食べたり飲んだりしたものを消化吸収して自分のエネルギーに転化するという臓器が、脾胃であるわけですが、この機能を高めて自分でエネルギーに転化して補給していくという考え方方が漢方医学の特徴であり大事なポイントです。現代西洋医学の中で欠落している部分をしっかりと支えていく医療技術を持っているという点で、加味帰脾湯の提示は大変興味深いです。